



日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報 第22号

発行日 令和4年3月20日

事務局 日ポ・サロン

長岡 正

〒573-0084 枚方市香里ヶ丘6-14-6

TEL.072-852-2147

<http://www.nipposalon.org/>



2021年10月21日 第18回ショパン国際ピアノ・コンクール 2位の反田恭平氏(左)と4位的小林愛実氏

Chopin

日本ショパン協会

お元気でいらっしゃいますか？

ポーランド留学生支援団体 日ポ・サロン代表

高 島 和 子

皆様、コロナ・オミクロン株が蔓延しマスコミ報道にも煽られ、感染とワクチンがまるで追いかっこ状態の中、お変わりございませんか？お伺い申し上げます。

日頃は日ポ・サロンを応援下さり有り難うございます。

2020・2021と神戸大学が留学生受入れを中止、2年間待ち続けた日ポ・サロン19期招聘留学生チャルニ・クラウディアさんは2022・9月にワ大日本学科を卒業(予定)、せめて4月から半年の留学をと希望ですが、見通しが立たない状況です。日ポ・サロンの恒例行事も行えず皆様ともお会いしないまま開店休業状態で寂しい限りでございます。

参加予定だったショパン国際ピアノコンクールは1年遅れで開催され、反田恭平さんが51年振りの2位に小林愛実さんが4位に輝きました。そのガラコンサートに皆様と出席してその感動を共に味わうはずが本当に残念至極でした。

2022年は1921～1922にかけ日本軍が依頼を受諾、シベリヤの孤児765名を捜索救出後、東京大阪の赤十字施設で看護養育しポーランドに向け船出して100周年です。杉原千畝さんの命のビザと孤児救出を記念して敦賀に「人道の港敦賀ムゼウム」が建設され、「ポーランド人孤児救済事業の記録」彩流社発刊。ワ大学日本学科関連ではイヴォナ・ナヴロツカ教授が源氏物語のP語翻訳(5年計画)をスタートされ、前日本学科長エヴァ・パワシュルトコフスカ教授著「日本・ポーランド関係史II1945～2019」彩流社(日本語版)が発刊されました。日ポ・サロンの活動紹介・写真記載。是非ご一読下さいませ。

会報は京大で博士号を取得したヤヌシュ・ミトコさんと京大博士課程マルチン・タタルチュックさんの研究論文を掲載しています。それぞれ視点が興味深く大変な労作です。

皆様のご健康と御多幸を祈りつつ、今後共に日ポ・サロンを変わりなくご支援下さいますようお願い申し上げます。ご挨拶と致します。

2021年度 日ポ・サロン年次総会 (紙面による)

<2021年度 行事案>

1. 総会

今年度は緊急事態宣言中の期間中でもあり
紙面による総会とします

2. 留学生招聘

チャルニ・クラウディアさん予定
(神戸大学の留学生招致決定次第)

3. ポーランド旅行

昨年度の予定通り
(詳細は参加希望者に追ってお知らせします)

※コロナ禍により、この旅行は中止となりました

4. 2020年度 決算報告

行事案は 67名(過半数以上)の賛同を得て
可決されました



昨秋10月に迎える予定の新留学生 チャルニ・クラウディアさんは、神戸大学がコロナにより各国の留学生招致を断念した結果、残念ながら招致には至りませんでした。

10月予定のショパンコンクールそのものが1年後の秋とに延期となり、それに伴いポーランド旅行も延期といたしましたことをご報告いたします。



マルチン・タタルチュック
(京都大学文学部大学院現代文化学専攻)

「伝統文化の作られ方

国風文化と民俗文化を中心」

日ポサロンの皆様

こんにちは、マルチン・タタルチュックと申します。
ご無沙汰しております。
皆様のおかげで、日本での研究と生活が12年も過ぎてしまいました。今回は、高島和子さんからの声がけで、日ポサロンの会報に文章を寄せることになりました。会員の皆様の中には私のことを知らない方もいらっしゃると思ったので、今回は自己紹介の意味を込めて私の研究について簡単にお伝えしようと思います。よろしくお願いいたします。

自己紹介

私の名前はMarcin Tatarczuk(マルチン・タタルチュック)で、ワルシャワ生まれワルシャワ育ちのポーランド人です。ワルシャワ大学東洋学研究所日本学科を卒業してから、京都大学大学院文学研究科現代文化学二十世紀学専修で修士号を取得し、博士課程を修了しました。ワルシャワ大学在学中、2005年の日本政府文部科学省の国費留学生として一年間静岡大学に留学しました。留学中、京都を訪れた際に初めて日ポサロンの皆さんと出会い、一緒に黄檗と宇治へ行きました。日本学科を卒業してから再び国費留学生として2009年に京都大学へ研究生として籍を置き、2011年に正式に大学院へ入学しました。京都へ拠点が移ってから、しばしば日ポサロンの皆さんとお会いする機会が増え、神戸大学に留学する私の後輩の世話をしたり、遠足や花見などをご一緒させていただきました。日ポサロンの例会などでお話をする機会も数回いただきました。現在は、京都大学、神戸大学、大学コンソーシアム京都で非常勤講師を務めながら、博士論文の執筆と研究を続けています。

研究背景

ポーランド生まれの私には、日本は昔から伝統を大切に守り、現代でもちゃんと伝統が継続されているように見えました。ポーランドの伝統は、クリスマスやイースター以外はあまり日常的に目にすることもなく、伝統工芸、伝統舞踊、伝統衣装などは、普段接することはありません。柔道、合気道、弓道などのような伝統的な武術もポーランドには存在しません。また西洋諸国では、迷信、呪術、妖怪、幽霊などといった民俗文化も、歴史的な文脈以外では登場することがありません。民俗文化(フォークロア)は、どの国や民族にも確かに存在するはずですが、それらが現代社会において出てくることはまずないのです。ポーランド人の殆どは、スラブ神話や自分たちの地域の風習について知らないし、民族衣装を着たこともなければ、踊りを習ったこともありません。それに対して日本の民俗文化は幅広く現代日本に浸透していて、古くからの風習を知る人も、占いを好む人もおり、妖怪や幽霊話は人気を集め、頻繁に日本の大衆文化の中で使われています。現代社会において日本がどのように伝統を継続しているのか、なぜ科学と技術が発展した日本に、いまだに民俗文化が一般的に使われ好まれているのか、その問いが昔から私の頭にはありました。

ワルシャワ大学日本学科での研究

日本学科では、卒業論文で平安時代の説話集を元にして、鬼・天狗・百鬼夜行について論じ、日本文化の大元である平安時代にフォークロアがどのようなものだったのか、荘子文化が現れた理由や目的について考察しました。修士論文でも同じく、現代日本社会に強い影響を与えた江戸時代の文化に着目し、江戸の怪談、幽霊や妖怪、百物語怪談会などについて分析し、そのころのフォークロアの有様を追求しました。

ポーランドでの研究では、日本の民俗文化の一部である鬼や妖怪について知ることができましたが、なぜそのようなものが現代でも知られ、娯楽としてまで消費されているのか、その答えは見つけることができませんでした。

京都大学での研究

京都に来て、京都大学に入った理由は、日本の伝統文化の象徴である京都において、どのようにその文化が受け継がれているかを研究するためでした。私が所属した二十世紀学専修は、現代のあらゆる考え方、社会傾向、文化が、近代と現代においてどのように形成されてきたかという問題に重点を置き、歴史書物からテレビ、雑誌、漫画までもを参考資料として扱い、観光などの社会行動も研究視野に入れている研究室です。

明治時代と伝統文化の「始まり」

伝統文化というものはどの国にも確かに存在しています。しかしイギリス、フランス、ロシアをはじめ世界各国の多くで、行政・教育・ビジネス・メディアなどにより文化が定義され、整理され、現在のイメージに合っていない要素は時には省かれ軽視されたりしています。それは、意図的に行われるときもあれば、時代の流れとともに自然に起きるプロセスでもあります。現代日本で共有されている日本文化のイメージも、定義され、整理され、一部の文化的要素と時代に重点が置かれています。その結果、日本文化は世界で評価され、あらゆる和風のものが好まれるという成功につながりました。日本自体のイメージも伝統を大切にしている国だと広く認識されています。その伝統を一目見てみたいという人は少なくなく、観光客に人気です。

明治時代、日本の独自の文化は何なのかと考え、歴史や文化を整理する動きが始まりました。この時代は、日本が250年間の鎖国を終え、一気に世界の国々と交流を始めた頃です。まず、他国と自国はどう違うのか、島国である日本の人々には、西欧諸国の人々が持つような国民意識がなかったため、日本列島に住む皆の共通点はどこにあるのかということを考え始めます。また西洋の学問や社会構造に習い、近代化を進め、文明開化を目指しました。新しく入ってくる学問や思想に対し、それまでに日本人が持っていた考え方の体系化と再評価も行われました。また他方では、日本が国際的にはまだ認識されておらず、中国と同一視されがちだったことから、日本政府は日本と中国の差別化を図ることにしました。日本の独自性を探り、日本らしい文化を定義してから国際的に日本文化を発信したのです。

伝統文化の整理をするときに、まず外国色、つまり中国の要素があるものと国内のものを区別しました。その代表的な例は、中国的な仏教と日本の神道を分ける神仏分離令です。同じく仏教と神道の混合が核となっていた修験道は分離ができないために廃止されました。陰陽師や占い師の活動も禁止され、幅広く非科学的な風習や迷信も、近代化を進む日本にそぐわないと判断され、禁止されたり、知識人から蔑視されたりしました。

国の文化を語るためには歴史を整理することも必要で、日本の歴史は、明治時代になってから正式に整理されていきます。まず日本史の軸は天皇家の歴史に据えられ、時代ごとの特徴は、美術に基づいて語られました。美術史の整理を行なったのは、お雇い外国人のアーネスト・フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)と彼の助手を務

めた岡倉天心(1863-1913)です。二人は明治政府からの特別な許可で、関西を中心に秘仏を直接目にし、その他にも寺宝・家宝などの取材とそれらの審査・整理を行っていきます。この二人の活動の結果、日本美術史の時系列が大きく定められました。こうした活動の中、藤原時代、のちに平安時代と呼ばれるようになった時代が取り上げられ、日本独自の様式が特に現れていると判断されました。この発想は江戸時代に生きた国学者の本居宣長(1730-1801)と同じものでした。本居宣長は、おもに『古事記』と『源氏物語』を研究し、日本の精神は神道であり、日本人の特有の感覚は平安時代文学に描かれる「もののあわれ」だと主張していました。彼は特に『源氏物語』を高く評価し、その読み方や解説の仕方を新たに作りました。本居宣長の主張と研究が次の世代に強い影響を与え、明治時代の政治家には本居宣長の国学を学んだ人も少なくありませんでした。

日本文化の中心になった京都

京都は、平安京として作られ、平安時代の政治・文化・文学の主な舞台でした。とはいえ19世紀の京都には、すでに平安時代の遺跡などは殆ど残っていませんでした。明治時代になってから1000年の間京都に住んでいた天皇家が京都から去り、公家などの有力者と文化人も明治天皇とともに東京に移り、かつての都が廃れてしまいました。19世紀後半の京都府知事(第2代榎村正直、第3代北垣国道)や政治家が京都を復興させようとし、近代化と産業化を進めることにしました。インフラ整備とともに琵琶湖疎水の工事も決まりました。琵琶湖から水を京都に届けることで、工場にも配水ができ、街灯や市電に必要な電気の発電もできました。しかし同時期に大阪も産業化を進めており、港町には勝てないことが明らかになったため京都府は復興の方針転換を決めます。京都市は日本の伝統文化の象徴となるべく、その一環として市内には歴史地区が制定されました。京都が伝統と文化の中心となる考えは、世界中を視察し京都にも家を構えていた岩倉具視(1825-1883)が明治政府へ出した「岩倉建議」で提案されました。岩倉は常々、日本はヨーロッパに習い国の歴史と伝統を主張すべきという考えを持っていました。東京と京都の役割をはっきりとさせ、近代都市の東京は近代文明の象徴と政治界の場とし、京都は歴史、伝統、文化の象徴として役割を果たすべきだと考えていたのです。天皇が政治・国の支配を行うのは常住する東京であるのに対し、即位の儀のような天皇家の重大な行事等は京都で行うという「二都制」が提案されました。

日本独自の伝統文化である平安文化とその象徴になった京都は、後に「国風文化」や「みやび文化」という言葉で親しまれるようになります。完成された国風文化が初めて外国で披露されたのは1893年

等院鳳凰堂の形(図1)を模した初めての本格的な日本館を出しました。会場内では日本文化の紹介として平安時代と室町時代の展示を作り、江戸時代の工芸品を販売していました。一方、日本国内で国風文化が公に披露されたのは、1895年、京都で同時開催された平安遷都千百年記念祭と第4回国内勸業博覧会に(図2)おいてでした。京都は平安時代の町として紹介され、平安時代の御所紫宸殿を模した平安神宮が建てられ、平安京を造った桓武天皇ゆかりの地と平安古典文学の舞台地が整備されました。記念祭に合わせて公式ガイドブック『京都名所独案内』が制作され、そのガイドブックで平安時代の舞台めぐりが奨励されました。平安遷都千百年記念祭の主な参加者は日本人でしたが、初めて外国人に入京許可が下り、京都を観光することが許されました。当時の外国人は、国風文化のために整備された場所や平安時代にまで歴史が遡る寺院などを巡っていました。

京都における国風文化には、室町時代の北山文化(足利幕府、金閣寺など)と豊臣秀吉のころの茶の文化が続けて追加されました。天皇の即位の儀である大正大礼と昭和大礼が京都御所で行われ、それに合わせて京都の街中が整備され、石碑・案内板・ガイドブックも作られていきます。これらの要素を含んだ国風文化は、行政によってささえられ、教育にも用いられ、そして昭和初期から観光資源としても使用されていきました。20世紀初頭から、未来の教師を育てる師範学校でいち早く修学旅行が始まり、生徒たちは国風文化のために整備された場所と天皇家ゆかりの地を巡りました。教師となったかつての生徒たちは、自身が修学旅行で見て習ったことを次世代の生徒に教えていくことになります。こうして行政によって整備されてきた日本特有の伝統文化が時とともに伝播していくことになりました。現代の修学旅行も同じパターンで京都と奈良を巡り、歴史と伝統文化に関わる場所を訪れ、日本の文化はどのようなものなのかを知る学習機会として続いています。

1930年代から伝統文化と京都へのイメージは基本的に変わっていません。今日でも、外国人も日本人も京都を伝統文化の象徴と日本文化の中心と考え、東京を行政や近代文明の中心と認識することが多いです。また平安時代が日本文化の根源と考えられています。京都がその役割を担うことにより、日本の歴史と伝統文化が可視化されました。京都で紹介される日本文化がメディアによって複製され、ビジネスや観光業によって商売に使われています。さらに国風文化は、同じ国に住んでいる人々に共通点を作り、国民意識を芽生えさせる役割も担っていま

す。

戦後には、日本の伝統文化を紹介するときに、江戸時代の文化も語られるようになりました。その時代の文化は前時代の貴族的な文化と違って、おもに庶民の文化であり、日本社会に強い影響を及ぼした文化と言えます。1970年代後半からは、源氏物語をはじめとする古典文学ファンの女性の視点が重視されるようになります。女性が自由に旅行をしたり、京都で買い物をしたりといった需要が増え、女性客の関心に応えるために京都の伝統産業は変化していき、美術・工芸・おもてなしに重点が置かれ、古典文学の世界としての観点から京都を語ることも重要になってきました。

このように日本の伝統文化のイメージが作られ、固定化され、何世代にも渡って同じイメージが共有されるようになりました。こうした流れの中、谷崎潤一郎のようにその文化を愛し、京都を頻繁に訪れ、京都に邸宅を構えるほどの人もいれば、柳田国男や岡本太郎のように、様々な目的で行政やビジネスなどによって選定された国風文化を嫌う人もいました。



(図1) 平安時代建造の宇治平等院鳳凰堂の形



(図2) 平安遷都1100年紀年祭 第4回内国勧業博覧会の図

日本の民俗文化(フォークロア)

それでは、前章まででご紹介した「正式」な日本の伝統文化に対し、迷信や妖怪などといった民俗文化は、現代においてどのように日本の代表的な文化となり、国内外で知られ、ビジネスやメディアに一般的に使用されるようになったのでしょうか。最初に書いたように、江戸時代の日本人は、伝説や占いを好み、幽霊と妖怪が登場する怪談を読み、妖怪の絵を見て楽しんでいました。明治時代になってからは、西洋文化の思想と価値観が輸入され、日本社会の変化とともに新しい世界観と価値観が生まれました。文明と科学を重視していた当時の西洋人の目には、あらゆるフォークロアは野蛮であり、未開社会のものとして映っていました。そのため明治政府は、妖怪、修験道、陰陽道などの非近代的なものを生活空間から排除するために、それらを蔑視したり禁止したりすることにしました。その結果、妖怪と幽霊などは、近代化する町の人々の生活や日常の空間から姿を消し、おもに美術や演劇の世界にとどまりました。

明治時代は、学問が発展する時代でもあり、様々な視点から周りの世界が研究されていく時代でもあります。自然科学、博物学などの分野と同じく柳田国男、南方熊楠、井上円了らが地方や田舎にまだ存在していた民俗文化の研究を始めました。特に柳田国男は、地方の民俗文化こそが日本独自の文化だと考えていました。1910年に発表した『遠野物語』では、岩手県遠野地方の風習と伝承を紹介し、妖怪も、娯楽作品に登場するようなキャラクターよりも人々の生活空間の中にいるものとして登場します。『遠野物語』は、日本の民俗学の先駆けの作品であり、戦前は文人や知識人の間でしか読まれませんでした。1960年代ころには一般人も注目するようになりました。

終戦後の日本は、戦争被害から回復し、1950年代～60年代には、高度経済成長期を迎えました。それに伴い人々の生活水準も徐々に高くなり、ライフスタイルもアメリカの影響を強く受けていきます。1960年代、都市部は急激な発展を遂げ、山林や河川はコンクリートで固められ環境汚染が進み、町中からも自然が消えていきました。都市部に職を求め出稼ぎに出る人や、先進的な暮らしを求め移住する人々も増えていきます。そうした中、都市生活からは昔ながらの営み、伝統、風習、人間関係がだんだんと薄れてしまいました。コンクリートに囲まれた都市部で育った戦後生まれの若い世代は、都市部の日本像とも、国風文化を代表とした日本像とも違う、新たな日本文化を模索していました。彼らは東京でも京都でもなく地方に目を向けて、そこでいまだに現存する土俗文化を発見します。柳田国男の『遠野物語』はまさに彼らにとって求めている世界を紹介してくれる本でした。また地方の住人の中にも、自身の出身地の歴史と文化を研究する郷土史研究家も現れてきます。地方で眠っていた伝統文化は、明治時代、国

風文化が定められた際に省かれた部分の多くを含み、忘れられた側面を再び蘇らせました。

地方に日本の真の伝統文化を探し求めた人物として、芸術家の岡本太郎(1911-1996)も挙げられます。彼は1960年代に沖縄から東北まで日本中を旅し、忘れられた日本文化と神秘性について取材しました。その取材の結果は、複数のエッセイとフォトレポートとして出版されています。岡本にとっての日本文化の根本は縄文時代に見出され、彼の作品には原始的なモチーフが使われるようにもなりました。

民俗文化と大衆文化

1960年代には、特にテレビが一般家庭に普及してから、大衆文化が社会に大きな影響を与え始めます。伝奇小説や漫画も人気を集める中、その題材として民俗文化が取り上げられるようになり、特に水木しげるとその作品が注目を浴びます。水木しげるは、50年強の間作品を作り続け、何世代もの人々に民俗文化を紹介し、「妖怪」という存在を世間に知らしめました。彼は、江戸時代の怪談、妖怪の絵画を参考にしたり、全国の伝説を題材に自分の画風と語り口で様々な漫画を描き続けました。

郷土史研究家の研究や作家・漫画家の作品が映画やテレビ番組によく使われるようになった結果、1970年代から80年代にかけて日本の民俗的な神秘に関心を持つ人々が増え、全国的な「オカルトブーム」が起きました。オカルトと呼ばれた物事は、娯楽として消費され、真面目な文化としては捉えられていませんでした。それに対し妖怪は特に表象の観点から再評価され、美術館などで展覧会が開かれるようになります。妖怪が世間から注目されると同時に、文化人類学や民俗学の分野においてそれらを研究する学者も増加しました。代表的な人物に、国際日本文化研究センターの元所長である小松和彦が挙げられます。彼は長年に渡って鬼、幽霊、妖怪、迷信、民間信仰などを分析しており、学術論文に加えその単著・編著は夥しい数にのぼります。明治時代に正式に選定された国風文化では民俗文化が軽視され排除されたにもかかわらず、それから約100年後その文化が再発見され、再評価されるようになったと言えます。

1990年代以降、それまで一般的に娯楽として消費されていた妖怪とフォークロアは、徐々に価値のあるものと認識され、現在ではもはや日本にもなりました。それは大いに小松和彦の働きによるものです。彼は1990年代に正式な国風文化の象徴的な京都の在り方に対比させるように、京都のフォークロアを「魔界京都」と呼び新たに紹介しました。かつて京都で排除された文化の知名度を復活させ、国風文化だけでなく「魔界京都」も加えることで、京都のイメージを拡張したのです。小松和彦をはじめ学者たちは、100年前に明治政府が平安貴族の文化のみに集中し民俗文化を排除したことで出来上がった国風文

化には、民衆の文化の要素が欠けていると主張しました。彼らは新聞や出版社の協力を得て、1994年に京都で大希望に開催された平安建都1200年記念事業に合わせ、主に平安時代に由来するフォークロアを新たな京都文化として提案しました。かつて明治政府が平安文化に着目したのと同じ発想を利用し、平安の説話集などを使い、平安京の暗い側面を持つ歴史、怪談・奇談を現代京都の空間にとり入れました。平安建都1200年記念事業の開催をきっかけに「明るい」貴族的な文化に「暗い」民俗的な文化を足し、その「暗い」文化を「異界京都」や「魔界京都」と呼ぶことにしたのです。

1947年生まれの小松和彦は、1960年代に土俗文化に興味を持った世代であり、1970年代にオカルトブームに乗って自身が行ってきた民俗文化の研究を世に出します。民間信仰や妖怪についての研究を発表したのち、1990年代に入ってから京都新聞にて京都の伝説をテーマに連載をはじめました。のちにその連載が『京都魔界案内』(光文社、2002)として出版されます。「魔界京都」では、古典文学、謡曲、説話集に基づき調査で明らかになった京都の暗い歴史、伝説、迷信とそれらに関わる場所を紹介しています。幽霊・妖怪・天狗・鬼が現れ、怪異現象や不思議なできごとが起きた場所を現代の京都の地図上に示しました。これら怪談・奇談の由来は、国風文化の元になった時代と同じく、平安時代・室町時代、そして妖怪文化が盛んだった江戸時代にあります。この1000年間を通して、国風文化の時系列に並行するように、様々な民俗文化を利用して「魔界京都」という概念が生み出されました。

魔界京都と安倍晴明

小松和彦が魔界京都を提唱してから、その文化の一番の代表例となったのは陰陽師として知られる安倍晴明、「晴明ブーム」でした。1990年代までに安倍晴明(図3)は、古典文学の専門家の間のみで知られ、一般的な知名度はほぼない人物でした。反して江戸時代、安倍晴明は広く知られており、彼が登場する物語は出版もされ、のちにそれらが浄瑠璃や歌舞伎の演目にもなりました。明治時代を迎え政府が陰陽道を非科学的ものと判断し禁止したために、安倍晴明は次の100年の間に忘れられてしまったのです。

安倍晴明が再び認識されるようになるのは、1990年代になってからです。その大きなきっかけとなったのは、夢枕獏(1951-)が書いた小説シリーズ『陰陽師』でした。物語上で安倍晴明は怪異現象や事件を解決する若い探偵のような人物として描かれています。夢枕獏は戦後に生まれ、土俗文化に関心を持った世代で、伝奇小説やオカルトブームと直接関わってきた人物です。『陰陽師』は1993年に岡野玲子(1960-)により漫画化され、より多くの人々、さらにより若い世代の手に届くようになりました。小説と漫画



(図3) 陰陽師 安倍晴明

がお互いを支えあい、小松和彦を中心にした学者グループの学術研究も、陰陽師の世界をもっと知りたい人々に詳しい説明を提供するという三角構造ができました。研究成果があったからこそ一般人向けの解説本や安倍晴明と関わる場所を京都で案内するガイドブックも作られるようになりました。安倍晴明を伝えるフィクション・史実・表象が多岐にわたっていたために、あらゆる場面やメディアで陰陽師を容易に使うことができたのです。

『陰陽師』の安倍晴明は特に若い女性間で人気を集めます。野村萬斎が安倍晴明を演じた2本の映画と複数のテレビドラマも制作されました。晴明人気とともに京都にある晴明神社も注目されるようになり、安倍晴明に関わる中心的な場所になりました。晴明を求めて京都を訪れる観光客が増加し、晴明にまつわる本、漫画、アニメなどは大きな経済効果をもたらしました。やがて「晴明ブーム」と名付けられ、安倍晴明と彼に関わる民俗文化は京都の代表的な伝統文化の一部に加えられていきました。何故それが可能になったのか、安倍晴明には、これまでに述べてきた国風文化・民俗文化に求められる要素がすべて揃っていたからでしょう。

国風文化の要素：(公的な「明るい」要素)

1. 平安時代の人物で、京都に拠点を持っていた(伝統文化の起源とされた場所と時代)
2. 天皇及び天皇家、華族・貴族から重用されていた(貴族文化と関わっている)
3. 平家物語、大鏡、今昔物語、宇治拾遺物語などの古典文学に登場する(古典文学は国風文化の基の一つ)

民俗文化と伝説の要素：(俗的な「暗い」要素)

1. 陰陽師(平安時代の非科学的なファンタジー)
2. 京都を舞台に活躍した人物(60年代に学者たちによって再発見された土俗文化)
3. 江戸時代に親しまれた大衆文化(明治時代に排除され、90年代に小松和彦らが魔界京都の中で蘇らせた)

1990年代以前、民俗文化は70年代のオカルトブームでの扱いからも分かるように、あくまで単なる娯楽として低レベルなものとして認識されており、正式な伝統文化としての国風文化、貴族文化と肩を並べて語られることはまずあり得ませんでした。安倍晴明が持つイメージは、以上の国風文化の要素と民俗文化の要素の双方からなりたっているからこそ、小松和彦は晴明と彼に関する民俗文化を日本の伝統文化のレベルにまで持ち上げることに成功したのです。京都市も安倍晴明を好意的に受け止め、晴明神社をはじめ、京都に関する民俗文化、妖怪の文化を支えプロモートしはじめました。市にとって安倍晴明は、既存の伝統文化の象徴としての京都イメージに合う新しい要素でした。また、新しい客層を掴み、リピーターを増やしたいと常に考えている観光業にとっても、安倍晴明と魔界京都は新たな可能性でした。貴族文化には興味がないが民俗文化には興味があるという新しい層の人々を京都に呼び込むことができ、また歴史・平安時代・古典文学がそもそ好きのリピーター層へは未知の文化の側面を発見させる機会を提供できたのです。

また最近では、これまでに述べたような文化そのものに興味などほとんどない、という全く別の層からも、安倍晴明へ関心が寄せられる機会が訪れました。フィギュアスケートの羽生結弦選手が演じたプログラムです。彼は、劇場版『陰陽師』のサウンドトラックを用い、フリースケーティング用プログラム『SEIMEI』を披露し、「外国人が見ても通じる和の世界観」に挑みました。このプログラムで2015年「NHK杯国際フィギュアスケート競技大会」、2015年バルセロナ「ISUグランプリファイナル」、2018年「平昌オリンピック」フリースケーティングプログラムにて優勝を収めます。その影響で安倍晴明と晴明神社は羽生結弦のファンの間でも人気となり、この演技がきっかけで安倍晴明や『陰陽師』作品を知った、という人々も増えました。

夢枕獏と小松和彦によってプロデュースされた安倍晴明は、中国でも人気を誇っています。夢枕獏の小説と岡野玲子の漫画は中国語に翻訳され出版されています。そしてそれらを原作にした映画『陰陽師』も上映されました。また、中国のオンラインゲーム会社・NetEase, Inc.が『陰陽師』というオンラインゲームを制作したところ、世界的な大ヒットを収め、ゲームの世界観を描くミュージカルやアニメ、漫画、大規模な予算で2本の実写映画まで製作されました。その影響もありコロナパンデミック以前は、安倍晴明とゆかりのある京都の様々な場所に多くの中国人観光客が集まりました。晴明神社は国内外からの晴明ファンそれぞれのニーズに配慮し、境内に晴明の像、式神の像、一条戻橋のミニチュア(図4)、五芒星の井戸などを新設しています。

今日、安倍晴明そのものでなくても晴明を意識してデザインされたキャラクターが様々な作品に登場します。そのほかの日本的な民俗文化も、メディアや観光と行った娯楽業界の中で広く援用されています。「晴明ブーム」という現象にまで発展した安倍晴明人気は、妖怪などの要素も含んだ民俗文化を伝統文化の一部として捉え直し、正式な日本特有の文化として、宣伝し消費する動きを作り出したきっかけの一つであることは間違い無いでしょう。

「魔界京都」・民俗文化と日本の伝統文化

小松和彦は、長年の活動が評価され現代の民俗文化と妖怪研究の第一人者となり、現在でも様々なシンポジウムや学会で姿を見ないことはありません。また研究活動と書籍の執筆を続けるかわら、テレビ出演をしたり新聞に記事を寄せたりしています。小松和彦の単著と編著はほぼ毎年出版され、彼がプロモートした魔界京都も、NHK BSプレミアムで4時間SP『京都異界中継』として番組製作され、2017年8月9日に放送されるほど世間に認識されるようになりました。電鉄会社や旅行会社のホームページにも、当たり前のように魔界京都についての情報や案内が記載されており、書店を覗けば簡単に関連書籍やガイドブックを見つけることができます。

今日、日本の伝統文化を考えると、民俗文化もその一部であることは自然なこととして感じられます。大衆文化の中には妖怪などの日本産ファンタジーがよく使われるのも当たり前で、国内外問わず日本の妖怪・幽霊などといった異形・異界ファンは多く存在します。日本の社会がいかにしてフォークロアと伝統文化を意識してきたのか、その過程を研究していけば、日本にはなぜいまだに民俗文化が一般的に浸透し好まれているのか、日本がどのように伝統文化のイメージを確立させ、継続させているのか、どのような経緯を経て世界中で認識されるようになった

かという問いに答えることができると思います。日本という事例から、他の国でも同じようなプロセスがどのように行われてきたか、人間が周りの世界をどのように考え、認識しているのか、様々なものに影響され、行政、メディア、ビジネス各種分野によって、その世界観が作られていくという仕組みも見えてくるでしょう。

おわりに

長文を最後まで読んでくださってありがとうございます。この文章には詳細が足りなかったり、情報が省略されたりしている箇所もありますので、曖昧さを感じる方もいらっしゃると思います。今回紹介した日本特有の伝統文化と民俗文化の問題は大変複雑なため、数ページでそれを分かりやすく解説することは難しいと改めて痛感しています。それでも、私の文章から新しい発見や興味深いと感じられる部分があると少しでも思っただけなら幸いです。

日ポサロンの皆さんからの長年のご支援とご協力を大変うれしく思います。本当にありがとうございます。今後どうぞよろしくお願いいたします。

////////////////////////////////////



(図4) 京都 晴明神社内に再現された旧「一條辰橋」ミニチュア

「一條辰橋」

平安京造営時の一条大路に堀川を渡るために架橋されたもので、何度も修復されながら今も架橋時の場所にある。その後、堀川右岸の衰退が著しく、この橋(辰橋)を渡ること自体に特別な意味が加えられ、様々な逸話が生まれることになりました。

「辰橋」という名前の由来は、延喜18年(918)、漢学者三善清行の葬列がこの橋を通った際、父の死を聞き急ぎ帰った浄蔵が棺にすがって祈ると、父が雷鳴とともに一時生き返って抱き合ったという。時代が下ると、「平家物語」では美しい女性が鬼に化けたり、戦国時代には、「見せしめ」の場所としてもこの橋が登場します。



ヤヌシュ・ミトコ
Janusz Mytko

京都大学文学研究科現代史学専修

1997年にワルシャワ大学新言語学部日本学科修士課程に入学、エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授に師事。2003年の卒業後、京都大学文学研究科に入学、日本文部科学省、日ポ・サロンの支援を得ながら、永井和教授の指導で日本現代史の研究を進めた。2007年に修士号、2013年に博士号を取得。博士論文の題名は「大正政変－第三次桂内閣の成立及び崩壊に伴う政治危機の研究－」。2019年より、京都大学文学研究科で外国人共同研究者を務める。

「大正初期の政治研究をめぐる」

大正政変の研究状況

大正元年、すなわち1912年は日本の政治において重要な年であった。7月に明治天皇が崩御し、皇太子嘉仁親王が践祚した。前代天皇と異なって、新天皇は政治的経験が浅かったため、政治情勢の変化が予測されていた。再編成過程に特に刺激を与えたのは、第二次西園寺内閣の総辞職であった。1912年12月に、二個師団増設問題を理由に政府が陸軍の圧力によって倒され、西園寺公望の後任として桂太郎が推薦された。この新首相は、すでに内大臣兼侍従長として宮中入りしていたため、宮中と府中の別が乱されたという批判の声が上がった。さらに詔勅を通して目標を達成する桂総理の政治的手段も、強く批判された。

このような桂に対する批判的な世論の動きに応じるように、藩閥の非立憲的な政治に反対する第一次憲政擁護運動が始まった。院外の政治家、実業家、ジャーナリストが中心であったその運動は、速やかに全国に広がった。同時に、衆議院のそれぞれ第一党、第二党であった政友会と国民党の一部は桂内閣を非立憲的と追及、その後内閣不信任案を提出した。桂は自分の政党、立憲同志会を創立した後、再び詔勅を利用し、政友会に妥協を強いようとしたが失敗した。そこで、不信任案の可決を避けるために衆議院の解散を決意した。

1913年2月10日、総理大臣の政治手法に憤慨する民衆数万人が、帝国議会議事堂を取り囲んだ。それに対し、数千人の警察官が配置された。桂が停会を

決意した時には、民衆と警察官の小競り合いは騒乱に変わり、桂と関係のあった新聞社、警察署や交番の焼打ちが始まった。11日には暴動が地方にまで及んだ。そのような状況の中、桂内閣は総辞職した。憲政史上、民衆の力によって起こされた最初の内閣の辞職であった。桂の後任者には、山本権兵衛が任命された。

1950-80年代の大正政変に関する主要な研究は、唯物史観の影響があまりにも強く、それ以外の観点から検討された研究書が少なかった。80年代以降、問題のとらえ方が変わり、新しい流れの研究は大正政変における政治過程の分析を重視し、研究の中心は、護憲運動から桂首相の活動に移され、彼の政党政治導入の試みを高く評価するものもあった。私はすでに、1912-13年の出来事についていくつかの論文を完成させ、ポーランドの東洋学者の中に最も影響力がある *Przegląd Orientalistyczny* やアメリカのフロリダ国際大学で出版される *Japan Studies Review* を含む学術雑誌で、3カ国語(英語、日本語、ポーランド語)で発表した。例えば、*Japan Studies Review* に投稿された“Analysis of the Military Plot Against Saionji Kinmochi's Second Cabinet”(「第二次西園寺公望内閣に対する陸軍陰謀の研究」)と題する論文では、「大正政変」の前段階であった第二次西園寺内閣の総辞職の問題に触れた。論文の中心は、いわゆる「寺内内閣実現計画」および元老会議の展開におかれ、なぜ1912年末に陸軍・新聞記者の一部分によって西園寺の後任一番候補とされた寺内正毅が後任者として選定されず、宮中にいた桂太郎が再起用されたかについて、説明を試みた(Volume XXIII, pp. 3-34, 2019)。

一方、京都大学の『二十世紀研究』に乘せられた「第三次桂内閣の成立と憲政擁護運動の発端」では、憲政擁護運動の開始に大きな役割をはたした交詢社について取り扱い、特に運動に刺激を与えたと思われる三名の若手ジャーナリスト、『時事新報』の小山完吾、『大阪朝日新聞』の本多精一、『日本』の伊藤欽亮が運動によって何を達成しようとしていたのか明らかにした(第6号、pp. 53-77, 2016年)。



陸軍大将桂太郎公爵
『歴代首相等写真』より



桂太郎と立件同志会の議員たち
『公爵桂太郎伝 巻』より

また、Przegląd Orientalistycznyに掲載された論文、“Ozaki Yukio i Inukai Tsuyoshi – liderzy ruchu przeciwko rządowi Katsury Tarō”(「桂太郎内閣反対運動の指導者としての尾崎行雄と犬養毅」)では、運動の中心人物となった政友会の尾崎行雄、国民党の犬養毅が果たした役割の重要性を分析した。両者の見解は非立憲的な体質の桂政権に退陣を求め、藩閥政治の撤廃と政党政治の導入を目指した点で共通する。しかし、目標を達成するための手段まで同じではなかった。尾崎が閥族優位の官僚採用制度である文官任用令の廃止を提案したのに対して、犬養はその提案を強く批判し、制度の改正に先んじて閥族そのものを政治の場から性急に排除すべきだと主張した。この論文で私は、尾崎と犬養の間に生じた政治思想上の差異とその要因を明確にするとともに、彼らが護憲運動によって実現しようとしていたことを追究してみた(Issue 1-2, pp. 99-112, 2017)。

以上の論文の他、高島記念基金を受け2022年に自身初となる著書の出版を計画している。出版する本はポーランド語で書かれ、ポーランド人読者に大正初期の政治危機を紹介する。その題名はKryzys polityczny Taishō: Studium upadku trzeciego gabinetu Katsury Tarō (1912-1913) (「大正政変：第三次桂内閣崩壊の研究(1912-1913)」)とする。本の内容は日本語で作成された私の博士論文に基づき、最新研究の成果も編入され、ポーランド人読者のために必要な日本の歴史、日本事情の説明を数多く追加し、20世紀初期の日本史を幅広く紹介する予定である。

これからの研究方向について

大正政変の結果、西園寺・桂の両氏は、政治の最前線から退くこととなり、前者はそれ以降元老として活動したが、後者にとっては首相辞職が政治キャリアの終わりを意味していた。後継総理大臣には海軍大将山本権兵衛が任命され、政友会が再び与党の地位に就いた。

しかしながら、桂が辞職直前に創設した立憲同志会は、大正時代の政党政治の定着に重要な役割を果たすこととなった。桂は1913年10月に死去するが、1914年3月に山本内閣が総辞職し、その後任者として大隈重信が内閣を結成すると、第三次桂内閣の外務大臣であった加藤高明に率いられた同志会是新政府の与党となった。同志会は、1915年の衆議院選挙で勝利を収めて政友会を少数党へと転落させることに成功し、その後継政党である憲政会は、大正デモクラシー期の二大政党の一翼を担っていくこととなる。第三次桂内閣は民衆の批判を買って



加藤高明伯爵
『近世名士写真 其1』より

倒されたにもかかわらず、その政権の最も重要な業績は同志会の創立にあったと言えるであろう。

大正政変時に創設された同志会は、日本の対外政策の形成においても重要な役割を担った。第一次世界大戦開戦時の大隈政権において、日本がイギリスの同盟国として参戦する決断を下したのは、外務大臣で同志会の総裁でもあった加藤高明であった。加藤は、日英同盟の熱心な支持者として知られていたが、彼の決断を可能にした重要な要因は、大正政変期に起こった政界再編成であったことを強調しなければならない。すでに第三次桂内閣期に日英同盟の空文化は相当進んでおり、与野党ともその活性化に興味を示さなかったが、そのような中で桂だけは日英同盟の復活を強く望み、同志会もその対外政策方針の中心に日英同盟を据えたのである。その結果、同志会は加藤外相の参戦の決断を強く支持することとなったのである。私は以上の政治過程を詳密に分析し、大正政変・立憲同志会の創設と日本の参戦との間にある因果関係の立証に挑戦したい。

新政党の対外政策は一様ではなかったが、加藤高明の影響力が増大するとともに日英同盟の維持がその外交政策の軸となった。このことが日本の参戦や対外政策全般に与えた影響の大きさを強調したいと思う。注目すべきは、第一次世界大戦が勃発した時点で、立憲同志会の親英派以外の勢力はドイツとの戦争に消極的であり、したがって日本政界の少なからぬ部分が英仏露の連合国側に参戦することに消極的であったことである。つまり、第一次世界大戦勃発時に加藤とは別の政治家が外務大臣のポストを務め、同志会とは別の政党が与党であったならば、日本が対独戦争でイギリスを支援しなかった可能性も決して小さくはなかったと考えられるのである。

第一次世界大戦は前例のない出来事であり、その始まりは近代と現代の境界、新しい時代および新しい世界秩序の出発点として位置づけられた。戦争の結果、四つの帝国(ドイツ、オーストリア・ハンガリー、ロシア帝国、オスマン帝国)が倒れ、欧州では独立国家の数が大幅に増えた。戦間期における全体主義の台頭、第二次世界大戦、冷戦、資本主義と

共産主義の競争、そしてソ連の崩壊など、様々な歴史的展開の淵源には、第一次世界大戦とそれがもたらした国家間関係の巨大な変容がある。

日英同盟論者たる加藤の影響力の増大は、桂の思惑通りの展開であったと考えられる。桂が加藤に對外政策の舵取りを委ねたという事実は大いに留意すべき点である。第三次桂内閣はごく短命であり、その外交の方針が決定する前に終焉を迎えた。しかし、加藤の外務大臣指名により、桂は日英同盟を甦らせようとする勢力を結集させる契機を作ることになったと考えられる。日本の第一次世界大戦への参加がその帰結であったのではないか。参戦に消極的であった日本をイギリスの同盟国として世界大戦に巻き込んだ新しい政治勢力の意義を解明することを切り口として、日本史のみならず、アジア史や世界史の解釈にも新しい展望を開くことが、私のこれからの目標である。



親友のマルチンと木津川「流れ橋」にて

関西在住日ポ・サロン後援留学生(2020年度)

マルチン・タタルチュク	京都大学文学部大学院現代文化学専攻
ヤヌシュ・ミトコ	京都大学文学研究科現代史学専修
トーマス・ディモフスキ	神戸大学国際文化学部



ポーランド留学生支援団体 日ポ・サロン

<http://nipposalon.org/>

ホームページには、創刊号及び20周年記念誌(「20周年活動記録」)に掲載、会報第11号～第20号まで(「会報」に掲載)、その他、諸事全般についても掲載しておりますので、是非ご一読ください。

< 編集後記 >

2021年度はコロナ感染のため紙面総会から始まり、日ポの活動はすべて行うことができず、招聘留学生のチャルニ・クラウディアさんも神戸大学国際文化学部での留学が取り止めになり残念です。会報も行事の掲載文がないところで、ヤヌシュさん、マルチンさんがこれまでの研究論文を寄せてくださり読み応えのある内容となり感謝です。2022年になっても新しいオミクロン感染が広がり一日も早い収束を願い、外出控え在宅生活の日々でTV、読書で過ごしていました。そんな中、2月末になって東欧ではロシアがウクライナへの侵攻を開始し、ウクライナが激しい攻撃を受けているTVの映像を見て、その惨劇に涙し胸締め付けられます。隣国のポーランドへ寒い中、20キロ近く歩いて避難されているウクライナの人々の映像を見ては、この先どうなるのかとただただ案じ、平和平安を祈るばかりです。

事務局 岸 本 啓 子